



TITLE:

静態的貨幣理論と動態的貨幣理論 - ウィクセルを中心として -

AUTHOR(S):

服部, 新一

CITATION:

服部, 新一. 静態的貨幣理論と動態的貨幣理論 - ウィクセルを中心として -. 經濟論叢 1939, 48(3): 553-567

ISSUE DATE:

1939-03-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131219>

RIGHT:

東京帝國大學經濟學會 經濟叢論

第四十四卷(第三號)

昭和十四年四月三號

論叢

政府支出と所得増加……………文學博士 高田保馬
横井小楠の經濟思想……………經濟學博士 本庄榮治郎
特殊リンク制の諸問題……………經濟學博士 谷口吉彦

時論

支那に於ける門戶開放……………法學博士 末廣重雄
増稅案を論ず……………經濟學博士 汐見三郎

研究

神代に現はれし日本の創造の型……………經濟學士 中川與之助
公正價格の意義……………經濟學士 中谷實
靜態的貨幣理論と動態的貨幣理論……………經濟學士 服部新一
複式簿記法の形成過程に就いて……………經濟學士 岡本愛次

說苑

ル・プレーの經濟發達階段說……………經濟學士 宮本又次

附錄

彙報
外國雜誌論題

靜態的貨幣理論と動態的貨幣理論

——ウイクスセルを中心として——

服 部 新 一

貨幣理論の中核は、いふまでもなく貨幣の價值または貨幣の購買力の大きさの決定およびその變動の機構を明らかにしようとする點にある。ところで、もし假りに貨幣の價值の決定の問題とその變動の問題とが一應きりはなして考へられるとすれば、前者はいはば靜態的な貨幣理論であり、後者は動態的貨幣理論と呼ばれよう。前者は靜態的均衡狀態に對應する貨幣の價值の大きさを明らかにしようとするものであれば、後者は動態的過程において貨幣の價值の大きさが落ちつく機構を明らかにする理論である。さうしていづれの形態のものにせよ、嚴密に考へられたる貨幣數量説がその理論の妥當性をもちうるのは靜態的貨幣理論としてのみであることは、その理論構造が靜態的價格形成の理論を基礎にもつことから容易に理解できるであらう。^(註一)従つて具體的な現實の貨幣價格の形成、すなはち貨幣の價值の變動が問題となる場合、それを説明する理論は動態的價格形成の理論を基にしてはじめて十全なることをうるといふことも明らかであらう。ところが貨幣數量説は一舉にかかる動態的貨幣理論として適用されることを企圖する限り、それは大きな理論的飛躍を犯すものといはざるをえない。貨幣の價

値の變動は一面景氣變動過程における物價水準の動きにほかならないがゆゑに、動態的貨幣理論はひろく經濟變動に關する知識を前提としてのみ可能である。ウィクセルの貨幣理論上の貢獻はかかる動的貨幣理論を提供した點にあるといはるべきであらう。またさうであればこそ、彼の理論が新ウィクセル派の景氣理論として、またスエデン學派の經濟變動論としてひき繼がれたのである。

貨幣はつねにヴェエルに過ぎないといはれる。さうしてウィクセル自身もまたしばしばこのヴェエルについて語つてゐる。^(註二)その背後に横はる實質的な財相互の關係を隱蔽しないがためには、このヴェエルはとり除かれねばならぬ。價值および價格は貨幣單位における偶然的な絶對價格とは獨立的なものとして、從つてそれは貨幣および貨幣價格からはなれて取扱はれねばならぬ。靜態的な價格形成の理論はその意味ですべて貨幣を含みぬ、從つて相對的な交換價值または相對的價格に關する理論である。それは「貨幣の助けをもつて營まれる取引はあたかも貨幣の介在なくして行はれるかの如く」¹⁾考へられた場合の價格であり、しかもそれは現實への第一次接近として當然ゆるさるべき理論構成である。それゆゑに價格形成の最後の解決は更にその後に来るべき貨幣および貨幣價格形成の理論によつて果されうる。ところが、「貨幣の使用(あるひは誤用)は事實上はげしく實質上の交換現象および資本現象を左右しうる」²⁾ものである。さうすると、貨幣理論の課題はほかならぬ相對的價格を絶對的價格に換算する乗數因子の大きさを定めることにあるといはれるであらう。³⁾たしかにウィクセルのみならず、ひろく一般均衡理論においては、數多の財のうち一個は價值尺度または計算單位(numéraire)としてはたらし、他の財がそれにおいて表現される仕組になつてゐるが、間接的交換手段としての貨幣はなんらの役割をも演じない。

1), 2) Wickcell, Vorlesungen über Nationalökonomie, Bd. II, S. 4, S. 5.

3) G. Cassel, Theoretische Sozialökonomie, 4. Aufl. S. 131.

G. Myrdal, Der Gleichgewichtsbegriff als Instrument der geldtheoretische Analyse, (Beiträge zur Geldtheorie), S. 372. f.

そこで一たび抽象されてゐたかかものとしての貨幣をとり入れてはじめて、貨幣の貨幣としての作用が理解せられ、乗数因子の決定の機構が明らかにせられ、それを決定する方程式は組織に缺けたる一環を補ひうるものとなるといはれるのもつとものことであらう。⁴⁾ところが「交換としての交換のなかには貨幣の価値或は具體的な商品価格を規定しうる何ものもない」⁵⁾。「貨幣およびその交換価値の法則——或は見方を變へていへば——具體的な商品価格（貨幣価格）の一般的水準およびその變動の法則は、固有の商品相互の交換価値すなはち相對的な商品価格とはまつたく異つて規定される」。更に進んでは、「價格形成の法則を示す公式ならびに相對的交換価値に係する一切の公式は、貨幣の交換価値または商品価値の具體の高さが問題となる場合には無意味となる」⁷⁾、とさへウィクセルは極言する。さうだとすれば、一般均衡理論と貨幣理論とを同列に組合す、または對置しようとする試みは如何にして可能であらうか。

(註一) 貨幣數量説の説明原理が結局において行き盡した靜態的狀態の貨幣價值決定にのみ通用し、過渡の期間においてはあてはまらぬことは、既にフィシアヤ自身が繰り返し強調したところであり、また一般にみとめられてゐるところでもあらう。⁸⁾

(註二) ウィクセルはまた「講義第二卷」においては、貨幣を一つの機械の油に譬へてゐる。僅滑劑はもとより固有の機械の構成部分、すなはち起動力でもなければ道具でもない。摩擦なく進行する完全な機械においては全くそれを必要としないであらう。經濟的領域においても、摩擦なく進行する均衡狀態にあつては貨幣は必要ではない。

(註三) なほレオン・ワラスが既に相對的價格の理論と貨幣理論との綜合をいはゆる手許現金の理論をもつて企ててゐること、従つて彼の理論體系が單に相對的價格の理論にとどまらなかつたことが最近詳細に明らかにされつつある。¹⁰⁾

手許現金に對する需要を中心として展開せられてゐる限りにおいて、ワラスの綜合は機械的ではなく、貨幣の介入によつて相對的價格が如何なる變化乃至干渉を受けるか、またそのもとにおいて靜的な貨幣の價值は如何なる高さに落ちつくか、が闡明

4) 高田博士、『利子理論研究』收載「貨幣の價值の受動性」131-158頁。

同博士、『利子論』395頁以下。

5), 6), 7) „Vorlesungen“, Bd. II. S. 23, und S. 20-21. なほ „Geldzins und Güterpreise“ においては、次の如き言葉が見出される。「貨幣價格の規整者は、相對的價格のそれとは反對に、決して商品市場(または財の生産)そのものの

されうであらう。けれども、手許現金に對する需要についての省察そのものに問題がある。この點においてウィクセルはワラスのゆき方とは方向を異にし、手許現金の需要はむしろ動態の世界において意味をもつものと考へてゐるやうであり、またさうあるべきである。彼の潜在的流通速度無限大の可能性についての考察を参照せよ。¹¹⁾

二

周知のやうに、一方の立場からは、相對的價格を絕對的價格に還算する乗數因子を決定する方程式は、「總取引額は貨幣數量にその流通速度を乗じたるものに等し」、或は「貨幣所得は社會的生産物を購入する、この場合、所得總額は貨幣數量とその流通速度との積である」、等々の貨幣數量說的交換方程式によつて充たされるものとみられてゐる。だが貨幣はウィクセルもしばしば強調してやまないやうに、全く他の商品または財とは別個の異質的な要素であり、貨幣の數量そのものに執着をもつ限りにおいては、貨幣數量説は如何にしても相對的價格の理論と同列に組合せられない説明原理をもつことは、前掲のウィクセルの言葉を待つまでもなく一般に承認されてゐる結論である。従つて、その方程式は全く異質的な要素をとり入れたものといはざるをえない。何故なら、貨幣はその性質上「形式的」であり自體の價值をもたぬ「單なる交換手段」であり、ベンディクセン、シムムペエタアの名に結びつけて一般に認められてゐるところによれば、貨幣は市場に提供せられる財および用役に對する指圖または要求權そのものである。¹³⁾従つてかかる指圖としての性質のなかにのみ貨幣の價值の基礎が求められねばならぬからである。靜態的價格形成の一般均衡理論は、無制限な時間の經過を通じて繰り返へされる循環過程における經濟的數量相互間に、成立するところの相互依存關係を明らかにする點に、その本來の課題をもつものである。

事情からは生じない。むしろそれはこの市場と貨幣市場(廣義)との關聯のなかに求められねばならぬ。(S. 22.), 「商品交換そのものの法則は貨幣價格の絕對的高さに對して規準を與へう何ものをも含まぬ」(S. 35) 等々。
8) フイツァ「貨幣の購買力」邦譯209頁等。高田博士「新講」III 309頁。M. Fanno, Die reine Theorie des Geldmarktes, Beiträge zur Geldtheorie, S. 22等。

り、しかもまたかかる持続的な市場の假定のなかに既にある意味において動態的な問題への通路が見出されるといはれもするが、それが現實説明への第一次的接近をなす所以は、均衡成立の過程そのものの論理のゆゑであるといはねばならぬ。¹⁴⁾すなはち反面からいへば、現實の姿がかかる假想的狀態から遠き距離をもち、無限の變動過程にさらされてゐながら、經濟的事象の動きがつねにかかる均衡化への潜在的な可能性をもつものである、といふ點に求めらるべきである。ところが貨幣數量説の説く貨幣價格の均衡成立、すなはち貨幣の購買力の大さの定まる機構についてはさうはいはれないのではなからうか。例へば、貨幣所得と社會的生産物との均衡關係によつて、或はまた取引手段乃至支拂手段總量によつて、或はまた假りに貨幣に對する需要と供給といふ概念を構成することによつて、物價水準すなはち乗數因子が一義的に定まるとみる説明の仕方は、いづれにしても、それらの概念をすべて貨幣の數量に還元して了はねばならぬとき、問題とする貨幣の數量そのものは外部から他の要素によつて與へられ、しかもその貨幣の數量はもとより價値すなはち購買力の函數ではない。いはばそれ自體價値の函數ではないところの數量關係が貨幣の價値を決定する。すなはち與へられたる貨幣の數量または貨幣の流れが循環過程に浸潤するところに、貨幣の價値が受動的に定まる。例へば、手許現金を保有しようとする種々なる動機から貨幣が需要せられるが如き、或は中央銀行の恣意なる政策によつて貨幣の供給量乃至存在量が與へられるが如き、或はまた自然利子と貨幣利子の開きによつて貨幣數量が増減するといふが如き、本來の貨幣領域にとつて説明せらるべき要素が假定によつて與へられたるものと認められる限りにおいて、與へられたる貨幣の流が物價水準を決定する。従つて靜態的な貨幣價格に關する限り、その積極的な變動傾向はそれだけからは何ら示され

9) „Vorlesungen“, Bd. II, S. 4-5.

10) 高田博士「貨幣は被覆なりや」經濟論叢第47卷第2號、安井琢麿氏「貨幣と經濟的均衡」經濟學論集第8卷第4號。

11) Geldzins u. Güterpreise, S. 58. Vorlesungen, Bd. II, S. 75 f.

12) 念のために、ウィクセル自身の言葉を引用する。〔貨幣それ自體はたしかに何

ない。貨幣數量説がその説明原理をもつて貨幣の價値の變動を理解しうるための出發點となるべきことが要請される。貨幣數量説がその説明原理としては無効といはれるのも當然のことであらう。¹⁵⁾

しかしながら更に翻つて考へてみよう。もともと貨幣をヴェエルとして抜きとつた世界に貨幣を取入れてきたところで、かかるものとしての貨幣以上の作用は理解できないはずである。靜態的均衡状態においては、貨幣がヴェエルとして作用するはずであればこそ、その考察が現實説明への第一次的接近たりうるのである。さうしてウィクセルがいふやうに、貨幣の本質がその機能のなかに求められねばならぬとすれば、この場合、流通過程に轉々流轉する貨幣のはたきこそ、實は貨幣の最も抽象的な本質を語るものといひうるであらう。貨幣は「單なる交換手段」であり、また「移動財流に對する移動的參與手段」であるといはれるのも、貨幣のヴェエルとしてみられる機能にその本質をもとめたものであらう。その意味において、貨幣數量説は單なる靜態的均衡状態における貨幣の流の描寫以上のものを含むと考へねばならぬ。それは貨幣價値理論としては、貨幣價格の變動傾向については一切無言であり、それゆゑに無力なりといはれるとしても、しかもそれは何よりも貨幣の本質を最も實證的に説明するものとして、それゆゑにいはば貨幣本質論としてみとめられうるのではなからうか。更に繰り返していへば、靜態的貨幣理論としての貨幣數量説は貨幣の價値の理論としてよりは、貨幣の本質を實證するものとして承認されねばならぬのではなからうか。

ところが貨幣および貨幣機能の具體的なはたらき、従つてまた具體的な貨幣價格の形成およびその規整者が問題となるや否や、問題の領域は靜態的な相對的價格の形成の世界とは、その現實接近への度合においていはば同

ら直接の限界効用をもたない。何故なら貨幣は直接にも目先の將來においても消費されるべきものとして規定されてゐないから。ひとは次のやうにさへいひうる。貨幣は間接の限界効用、すなはちひとが貨幣と交換しえられ商品と同じ限界効用をもつと。けれどもこの限界効用は實はそれ自身貨幣の交換價値または購買力に直接に依存してゐる。"Vorlesungen", S. 21, S.

次元にあるのではなくして、その抽象の度合を異にする。靜態的均衡状態にあつて考察の順序から、同次元における一般均衡が交換、生産、資本化および信用へと具體化されてゆくのは異つて、相對的価格が絕對的価格に還算されるのは、一面からみれば單に相對的価格が貨幣單位における衣をかぶることに過ぎないやうにみえても、實はそれは相對的価格が次元の異なつた一步現實に近い段階に下りてくることが、即ち動態における價格形成にふみ入ることを意味する。さうして動態における價格形成について貨幣側の均衡およびその變動要因を規定するところに、貨幣の價值または絕對的價格の決定を一義的に見定めることができ、またその變動の道行が理解できるであらう。貨幣と靜態的均衡とを同次元において對置する限り、それは貨幣の性質をもの語る以上に出ることはできない。その性質の異質性からくる説明原理はいかにしても二つを有機的な結合にもたらしえない。けれども貨幣價格の形成が動態における事實であることを知るならば、靜態的均衡状態の假定をはなれることによつて、従つてある種の動態についてののみ、はじめて貨幣理論と相對的價格の理論とが原理的に綜合せられうることも自ら明らかなことであらう。ウィクセル自身述べてゐるやうに、相對的價格の均衡にあつては均衡攪亂はつねに均衡恢復への反動力を喚起するに反して、貨幣價格にあつては、その均衡攪亂はつねに累積的と稱せられる動態的發達を喚起し、もとの均衡は決定的に見棄てられるものである。¹⁴⁾ かかる「相對的價格の運動およびその均衡に對立する、具體的な貨幣價格の運動およびその均衡」を説明する原理は動態の世界において求められるとすれば、相對的價格を絕對的價格に換算する乗數因子は、動態における貨幣側の均衡を明らかにすることによつて定められうるであらう。かかる考へから推し進めてゆけば、貨幣理論と靜態的相對的價格の理論とは相容れないとな

146-147, および Geldzins usw. S. 17, 2. 21, S. 27, usw. 参照。

13) J. Schumpeter, Das Sozialprodukt usw, Archiv für Sw. u. Sp. 44 Bd., 1918, S. 636. F. Bendixen, Wesen des Geldes, 3. Aufl. 1922, S. 27 ff.

14) J. R. Hicks, Gleichgewicht und Konjunktur, Zeitschrift für Nationalökonomie, Bd. IV, 1933, S. 441-442. O. Morgenstern; Vollkommene Voraussicht

す、ヒックスおよびロオゼンシュタイン・ロダン等の考へは、その主張の當否は別として、貨幣價值理論の重點がどこにあるかを明白にした點において首肯さるべきものを含むといはざるをえない。ウィクセル自身の考へはなかに兩理論の排反の思想がどこまで明白であつたかは別として、さういふ解釋をゆるす餘地は十分にあるのではなからうか。例へば前掲脚註(7)の言葉の如き、また彼の潜在的流通速度の概念の如き。

三

價格形成の説明の第一次的接近としての靜態的均衡の假定は、根本においては、與へられたる條件が將來において何等變動しないといふ知識にもとづいて各主體が行動する點にあるといはれる。將來における如何なる變動も正確に見込まれ、各主體はこの完全な見透しのもとで行動するといふ假定は、いはば第二次的接近としての準靜態といはれよう。カッセルの「均齊的に進行する經濟」およびヒックスの「動態的均衡」の概念はかかるものと解せられる。第三次的接近としては、完全には見込まれない將來への豫想(Anticipations of an imperfectly foreseen future)が交換および生産に如何なる影響を及ぼすか、を分析することにある。これはまつたき意味において經濟動態の問題である。¹⁷⁾ 靜態的乃至準靜態的均衡の成立が將來に對する見込の完全さを前提する、といふ主張は例へばヒックスによつて次の如く述べられてゐる。生産はいふまでもなく時間を必要とするが、かかる時間をもつた間接の生産方法をとらしめる動機は將來の價格に對する期待にある。だから現在の價格とともに將來の豫期された價格が各主體の行爲に如何なる影響をもつものであるか、を問題としなければならぬ。靜態的均衡にあつては、現在の價格と將來の價格とを同視することによつて均衡が一義的に定まる。交換の場合を考へると、 ∞ 個の財および

und wirtschaftliches Gleichgewicht, Zeitschrift f. Nationalökonomie, Bd. VI, 1935, S. 353. なほヒックスは持續的な市場における均衡がある意味で動態的過程の通路であることをば、ニュートンの運動の第一法則「物體は同一速度にて直線に運動をつづける」といふ比喩をもつて説いてゐる。

15) Keynes, "Treatise on Money", Vol. I, p. 133 a. p. 221 ff. 鬼頭仁三郎氏譯

用役の需給と自由なる資本の需給は、それらの價格および利率の決定のために丁度 $\Sigma_{t=1}^n$ 個の方程式をもつ。けれども、かかる假定をはなれると現在の價格と將來の價格とは同視されえない。 $\Sigma_{t=1}^n$ 個の現在の價格とともに數多の將來の價格があるが、その決定のためには、 $\Sigma_{t=1}^n$ 個の方程式しかない。そこで次のやうに考へる。ある特定の時点において一定の期間の出來事を豫め見込むことができるものと假定する。すなはちこの期間内における與件の變動は見込まれるものとする。ところでこの期間を任意に短い Δt 期間に刻む。それはこの期間内の價格の變動が問題とするに價ひしないほど短かくとる。さうすると全體として $\Sigma_{t=1}^n$ 個の價格が決定されなくてはならぬ。供給と需要とは現在にあつては相等しいといふ條件だけでは、もとより問題は解けないが、 Δt 期間内のそれぞれにおいて如何なる價格が需給を相等しくならしめるかを見ると、 $\Sigma_{t=1}^n$ 個の價格に對して $\Sigma_{t=1}^n$ 個の方程式をもつこととならう。これは何を意味するか。經濟的與件が如何やうに變動しても、若し價格組織が完全に見込まれさへするならば、需給を不均衡ならしめ、豫想を裏切るといふことなしに進行する價格組織があるといふことである。その意味において、最廣義における均衡の豫備條件は何よりも見込の完全さ (Vollständige od. Vollkommene Voraussicht) である。¹⁸⁾ このヒックスの方法に對して次のやうに考へられる。一見ヒックスの方法は與件の變動しつつある期間にかかはらしめられてゐるやうに見えても、その實、豫想がその期間において變化するをゆるさないやうな、しかも豫想が當該期間において完全に實現するやうな短い期間は存しない。それゆゑにそれはただ一時點に對してのみ、すなはち期間のはじめに對してのみ決定されうるものである。従つて瞬間的な均衡、すなはち與件の變動以前の、それゆゑに豫想された結果が現はれる以前の均衡にのみかはら

ケインズ貨幣論第2分冊、17頁及び135頁以下参照。

16) Geldzins usw. S. 92-93, „Vorlesungen“, Bd. II, S. 224.

17) B. Thomas, Monetary Policy & Crisis, p. 66. ff.

18) J. R. Hicks, A. a. O. S. 444 ff.

しめられてゐるに過ぎない。¹⁹⁾ しかしながら將來時點における價格組織の豫想が完全に先取りされうるものであるならば、かかる瞬間的な均衡が連續的に次々に成立してゆくものと考へうる根據は十分にあると思ふ。さうして一時點における均衡が一義的に決定されうるがためには、從來のやうに單に效用函數および生産函數だけではなく、將來の時點に對する價格の豫想も與件のなかに採用されねばならぬか、どうかは、モルゲンステルン、ヒツクス等によつて明白に肯定されてゐる。²⁰⁾ たしかに靜態的均衡狀態において各主體が日々同一の行爲を繰り返へすといふのも、それは實はなんらそれ以外のことを企てようとする刺激をもたぬからであらう。また準靜態においては、與件が如何に變化してもそれがすべて先取りされるがゆゑに、豫めそれに適應しうる計畫が立てられ、連續的に均衡が進行してゆくものとみられる。將來時點における價格の豫想が各主體とりわけ企業者の態度をいぢるしく左右するものである以上、それが與へられなければ均衡は一義的に決まらない。しかしながら將來を先取る主體の主觀的な見込は行爲者の行動そのものであり、また經濟的出來事は主體の行爲に依存するから、客觀的なまた實質的な與件の一つとして撰ばれるのではなく、むしろ將來の見込みの完全さは靜態的および準靜態的均衡の成立する前提として、または「豫備條件」としてみとめらるべきであらう。恰も「完全なる競争市場」の前提の如く。²¹⁾ さうして第三次的接近としての動態的均衡は、まさしく將來の見込みが不完全であり、不確であるといふ前提のもとに、豫期せざる出來事に對して各主體が如何に準備し、如何なる態度を決定し、しかもなほかかる條件のもとで如何なる均衡が成立するかを明らかにしようとするものである。さうしてこれは「靜態的理論が動態理論の方向において取りうる最後の段階として認めらるゝことができる。」²²⁾ かかる均衡はもとより一時點または

- 19) L. M. Lachmann, „Preiserwartungen und intertemporales Gleichgewicht,“ Zeitschrift f. Nationalökonomie, Bd. VIII, Heft. 1. 1937, S. 35, u. 42.
 20) O. Morgenstern, A. a. O. S. 356. J. R. Hicks, “Mr. Keynes’ Theory of Employment,” Economic Journal, June 1936, p. 241. なお P. N. Rosenstein-Rodan, “The Coordination of the General Theories of Money and Price,

期間のはじめにおける均衡としてしか成立しえない。何故なら、與件が不確定であり見込が不完全であるといふ前提のもとでは、ある瞬間ひとたび成立した均衡が続いて事實上の取引に移るとき、その均衡は直ちに裏切られるかも知れないからである。それは時間的経過における出來事の變動の因果的または函數的關係、或は繼起的な變動のいはば變動率を分析しえないが、一切の變動から時間を抜きとつてしまつて、ただ將來時間の先取りだけがとり出されて、それがその瞬間の各主體の行爲に對して、從つてまた價格形成に對してどれほどの意味をもつかを明らかにする。ここでは豫想 (Anticipationen) は單なる豫想 (Erwartungen) とは異なつて、將來の出來事がよつてもつて異なる經濟主體によつて先取される Zeitindex である。²³⁾ 從つて變動が豫想を通じて與へられたる時点における價格形成に反映する。その意味でそれは價格形成の一條件であるといはれよう。しかし「動態的均衡」は一時點に關する限り動態的過程における具體的な價格形成の説明のための出發點である。さうして、この説明のためにはどうしてもミールダルのいはゆる “ex ante” (looking forward) の概念とともに、“ex post” (looking backward) の概念が相補はれねばならぬ。それによつて變動過程における期間分析に進むことができる。豫想の複雑なる構造の分析はいま直接にここに觸れない。ただかかる具體的な現實に近い段階において動態的價格理論を展開しようとしてつあるのが、スエデン學派の “Stockholm Theory of Processes of Contraction and Expansion”²⁴⁾ であることを指摘するにとどめよう。注意すべきことは、この段階にあつてはじめて貨幣理論は包括的な一般の價格理論の一部をなすといふことである。²⁵⁾

四

Economica, Aug, 1936. 参照。ラツハマンは「價格の豫想は均衡の與件にあらず」と反對するが (A. a. O. S. 37 ff.) 均衡成立の與件ではないにしても、暗黙の前提としての豫想の完全さ、または不完全さを明白にいひあらはしたところに、ヒックス等の功績をみとめねばならぬであらう。なほこの點については、F. H. Knight, “Risk, Uncertainty, and Profit,” 1933, p. 79. 参照。

周知のやうに、「嚴密なる意味における」貨幣價值理論は一般均衡理論の外部に取殘されるといふ主張は、ヒックス、ロオゼンシュタイン、ロダンによつて最も徹底的に主張されてゐる。その主張の骨子はただこれだけである。完全なる見込または豫想の確實さといふ均衡の前提條件は、手許現金を保有しようとする欲求を零ならしめ、従つて貨幣の流通速度を無限大ならしめる。だからこの場合、相對的価格は決まつても、物價水準はきまらない。貨幣を手許に持たうとする動機はただ、不確實な將來の支拂に備へうがためのみである。與件と將來の支拂の總額とが絕對的に確定してゐるならば、貨幣はそれに對して用意せられる必要はない。支拂が満期となるまで、ひとびとは銀行を通じて貸付けるを有利とするであらう。恒常的な貸付と回收との不便さを避くるために、いはば便宜のために一定量の貨幣が必要とせられるといはれるかも知れない。また事實上の支拂が必要とする時間は、もはやこれ以上減少することができない極少量の貨幣を必要とするといはれるかも知れない。けれども、第一に借手の支拂約束が現金の代用をなしうるはずであるし、これは電話一つで間に合ふことがらである。第二に銀行小切手、手形等は極少量の貨幣をさへ無用ならしめるであらう。ゆゑに、經濟的與件の將來の發達およびそれから生じる價格の動きが完全に見込まれてさへあるならば、各主體は貨幣としての貨幣をもつ動機をもたない。さうして銀行は現金準備の必要をなんら感じない。若し何人かが現金を保有しようと志すならば、もはやそれは均衡状態ではない。銀行はかかる状態においては無限の信用創造をなしうる可能にあるであらう。さうして、これを資本として需要するものがないとするならば、銀行は貨幣とともに姿を消すのほかはない。²³⁾ ゆゑに「手許現金としての貨幣は見込が不確かであるときにのみ、またその限りにおいて存在する。それは各個人の不

21) 青山秀夫氏「獨占の經濟理論」15頁、以下參照。

22) B. Ohlin, "Stockholm Theory etc." *Ec. J. March* 1938, p. 54.

23) O. Morgenstern, *A. a. o. S. 351*, Anm. 參照。

24) B. Ohlin, *ibid.* p. 57. "ex-ante," "ex-post" については、Myrdal, *A. a. O. Kap. V.* 參照。又 F. H. Knight, *ibid.*, p. 210 and p. 234-225. 參照。

確さの感じの函數であり、これに應ずる一手段、すなはち確さに對する欲望を満足する一財である。靜態的均衡にあつては見込の確實さが假定されてゐるがゆゑに、貨幣と靜態的均衡とは相容れない。²⁷⁾

貨幣理論を價格理論に組み入れるには、どうしてもそれ自體價值なき貨幣に對する主觀的な價值評價をもち出さねばならない。けれども手許現金を保有しようとする動機は如何なるものであつても、靜態的均衡と矛盾する。ケムブリッジ學派の實物殘高數量方程式も無意識のうちに靜態ならざる世界を前提してゐるとはいはれないであらうが。或はまた逆に靜態における手許現金の需要は主觀的動機をはなれて客觀的に與へられるといふことを無識のうちに前提してゐるのではなからうか。ケインズによれば、手許現金の大きさは個人の決意によつて定まる。一定の手許現金を所有することの便宜⁽²⁸⁾ (degree of convenience) は、この所有が拂はねばならぬ犠牲の大きさ (degree of sacrifice) ⁽²⁹⁾ によつて測られる。手許現金は犠牲すなはち利子の損失を意味する以上、「根本的には望まれざるものである。²⁸⁾」しかもなほこれが保有に一定の效用が見積られるとすれば、それは將來の見込の不確さに對する準備以外にない。このことはピグウにおいては更に明白である。すなはち「各人は生活の日常取引を面倒なく行ふと共に豫期せざる要求に對する不安を除き得るがために、法貨に對する要求權の形態において、彼の資源を十分に保持せんと努める。この二つの目的のために人々は一般に法貨に對する要求權の形態に於て小麥の一定量の全價值を保持せんことを撰ぶ。かくして何れの瞬間に於ても、法貨に對する要求權の確定要表が構成される、²⁹⁾」云々。手許現金は經濟主體の意志によつて決定される。主體はその經常支出を遂行しうるがために、將來の出來事に準備するために一定量の現金を手許に保有しようとする。その現金に對する主體の評價が變化すると、それは

25) J. M. Keynes, "General Theory" p. 293-294 參照。

26) J. R. Hicks, *ibid.* S. 447-447. 高田保馬博士「利子論」395頁以下 參照。

27) P. N. Rosenstein-Rodan, *ibid.* p. 272.

28) M. W. Holtrop, *Die Umlaufgeschwindigkeit des Geldes, Beiträge zur Geldtheorie*, herausgeg. von F. A. Hayek, S. 135. H. Neisser, *Der Kreislauf des*

結局貨幣數量の増減となる。これが靜態を前提して展開されてゐるとみれば、明らかな矛盾を含むことは指摘するまでもない。事實上固有の手許現金が經濟主體の意志によつて決定されることは確かにはちがひないが、豫期せざる出來事があらはれないところにあつては、それは無用である。若し我々が「靜態的手許現金」といふものを考へるとするならば、それはもはや將來のための準備として役立つために要求されるのではなく、それは一定の將來の時點において一定の目的に對して支出せらるべくはつきり確定したものであるはずである。従つて「手許現金の大きさは決して經濟主體の單なる意志にかかはるものではなく、むしろ收入と支出の流の組み立を決定する生産過程の組織と技術とに依存するものである」³⁰⁾それは主觀的な價值評價をはなれて、純客觀的に決まるといふほかはない。いはば慣習または制度的なる要素として、その大きさが與へられるだけである。高田博士が「一定の生産組織、交通組織、販賣組織が與へられてゐる以上、貨幣の流通速度は過去の物價の情力を離れて、貨幣要求權説の本質を貫き通す限り、流通速度は所與であり、一定したものである」³¹⁾といはれるのも、まさしくこの意味においてであり、手許現金の大きさに主觀的な價值評價がなら加はらないことの主張であると思ふ。従つてウィクセルの「完全に組織された信用經濟」といふ極限の假定を取りいれない限り、貨幣は客觀的な制度的要素として靜態に入り込む。しかしそれ以上ではない。一定の貨幣および信用制度が與へられる以上、ヒックス等の主張のやうに飽くまで貨幣と靜態とは相容れないとはいはれない。そこには主觀的な動機をはなれた靜態的な流通速度が貨幣數量とともに與へられる。さうしてかかるものとしてしか貨幣が靜態に入り込まないといふ、まさしくその點に貨幣の本質が認められるといひたい。さうして主觀的動機によつて決定される手許現金の大きさは、いか

Geldes, Weltwirtschaftliches Archiv, Bd. 36., 1931/I, S. 365. なほ Geldzins usw. におけるウィクセル自身の手許現金の概念 (S. 50-52) を参照せよ。

- 29) A. G. Pigou, Essays in Applied Economics, p. 175-76. なほこの引用文は邦譯ケインズ貨幣論、147-148頁より孫引。
30) Holtrop, ibid., S. 132. 傍點は引用者。31) 高田保馬博士「利子論研究」151頁。

なる動機からにせよ、すべて「動態的手許現金」³²⁾といはれよう。それは將來に關する不確さのなかにその根據をもつからである。貨幣價格の形成、從つてまた貨幣價値の理論においては、この動態的手許現金が「確さに對する欲望を満足する一財」として作用する限り、それは動態的價格形成の理論を背景にもたねばならぬ。この意味でヒックス次の言の葉は是認せられねばならぬ。「貨幣の使用は不十分な見込と密接な關聯にあるがゆゑに、それは危険の理論との密接な結びつきにおいて研究されねばならぬ。貨幣の流通速度はその最も重要な點において危険の函數である。」³³⁾

(註) J. M. Keynes, *Treatise on Money*, Vol. I, p. 227. Vol. II, p. 44. 參照。尙 “General Theory of Employment, Interest and Money,” 於て、ケインズは周知のやうに liquidity-preference をは transactions motive, precautionary-motive 及び speculative-motive の三つの動機に分つてゐる。(p. 170.) かくして靜態または將來の利子率について何らの不確さも感ぜる必要のない狀態のもとにあつては、つねに取引動機は脱落するとみられる。即ち前の二つの動機は靜態的なものである。さうしてこれは所得の函數であると考へられてゐる。貨幣數量が増加すると利子率が動いて所得は貨幣數量の變動と靜態的手許現金の變動とが一致する水準に至るといふ。(p. 208-209) けれども、この靜態的手許現金はケインズの意圖には反して、主觀的に定まる大きさではなく、the income-velocity of money がほゞ一定のものともめられる以上 (p. 201) 客觀的に定まると見るほかはないと思ふ。

後記。 此論文の筆者服部新一學士は卒業後、大學院入學、經濟原論を專攻しつつ、一昨年秋東亞同文書院教授として赴任せられたが、去る一月十八日病を獲て急逝せられた。俊秀篤學、知人盡く其將來に期待してゐたが誠に痛惜にたへぬ。此論文は近く公にせらるべき譯書ウィクセル『金利と物價』に加へられたる解説の一部分である。高田保馬識す。

32) ホルトロブは手許現金を靜態的と動態的とに區別し、前者は客觀的に、後者は主觀的な動機から定まるものとする。これに對して、安井琢麿氏は靜態的均衡においてなほ手許現金に對する需要を主觀的價值評價から引き出されてゐる。「貨幣と經濟的均衡」前掲20頁以下及び78頁以下參照

33) Hicks, *ibid.*, S. 448.